その本はそこに

読書案内 13　～新聞を愛した人～

「天人　～深代惇郎と新聞の時代～」 後藤正治　❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖❖

▼深代惇郎（ふかしろじゅんろう）朝日新聞論説委員、「天声人語」担当。1929 年 4 月 19 日生まれ。1953 年、朝日新聞入社。ロンドン、NY 特派員、東京本社社会部次長などを経て、ヨーロッパ総局長や論説委員を歴任。1973 年 2 月 15 日から 1975 年 11 月 1 日、入院するまで、コラム天声人語を執筆。12 月 17 日、急性骨髄性白血病のため死去。享年 46 歳。

▼この本はノンフィクション作家である後藤正治さんが書いた深代惇郎さんの物語です。・・・モーツアルトのごとく、天がきまぐれに、このような書き手を地上によこして、さっと召し上げた。深代惇郎は天がこの世に遣わした人、「天人」であったのかもしれない。

…下記は、深代惇郎の天声人語・全 3 冊（朝日文庫）より。（抜粋及び全文）

▼…「天声人語」は「天に声あり、人をして語らしむ」の意。しばしばこの欄を、人を導く「天の声」であるべしといわれる方がいるが、本意ではない。民の言葉を天の声とせよ、というのが先人の心であった…（S49.1.5）

▼大和・法隆寺の宮大工、西岡楢光さん、常一さん、楢二郎さんの親子 3 人が「吉川英治賞」をうけた。…木の命について。千年のヒノキなら、あと千年の命がある。鉄の命はせいぜい 400 年、コンクリートは 100 年。ヒノキに鉄を打ち込むのは、ヒノキの命を断つアホウなことだ、ともいう。…長谷川如是閑…「職人かたぎ」という一文がある。暴風雨のとき、植木屋の親方は庭が心配で得意先にかけつけ、カワラ職人は翌朝、屋根の様子を見にきたものだ。…そうしたことは「職人の得意先に対する義理よりは、むしろ自分の仕事に対する誠意だ」といっている。…自分のスタイルを持ち、自分の作る物をいとおしみ、物と対話をかわしながら誠実に仕事をすること。それは少しも古いこととは思えない。（S49.3.7）

▼統一選挙の後半が始まった。選挙戦とは主客転倒の期間をいうと定義する人もいる。なるほど権力なき民は、権力あるセンセがたに、この期間ばかりは、おがまれ、お願いされて、主権在民という床の間を背にして座らされる。この種の「あべこべ」について。町に出れば、道は車に占有されて、歩く人は、地下に押し込められ、歩道橋とやらに押しあげられる。人よりは車がえらい。そのあべこべが当たり前になって、あべこべ無感覚症状が生まれてくる。新しいものを買って古いものを捨て、こわすのが、生活の向上であると、思い込む。…（S50.4.18）

▼地動説で知られるニコラス・コペルニクスは、今からちょうど 500 年前のきょう 2 月 19 日、ポーランドのトルニという町で生まれた。ポーランドをはじめ世界各地で生誕記念祭が行われる。昔の人は、地球を宇宙の中心にすえて、ものを考えてきた。太陽は東から出て西に沈む。静止した地球のまわりを天が回るのだ、とみてきた。この天動説をコペルニクスがひっくり返した。太陽こそ宇宙の不動の中心であり、そのまわりを地球が回っているのだ、という地動説をとなえた。五百年後の今では、何でもない説のように思える。しかし、人類が地球中心のものの考え方から完全に脱出するのは、実はそう簡単なことではなかった。たとえば、太陽が銀河系宇宙の中心ではなくて端っこの方に位置する 1 個の星であることを、人類はつい 50 年前まで知らなかった。さらに銀河系宇宙の 2000 億個の星のなかでは、太陽はごく平凡な星でしかないこと。また、地球に以て知的生物もいれば花も咲く可能性のある星が何億とあるらしいこと。つまり、私たちの地球が唯一の特等席でないと悟ったのは、第二次大戦のころの話だった。いいかえれば、どんなに人間が地球中心、自分中心にものを考えたがる動物であるか、だろう。それを最初にひっくり返したのがコペルニクスだった。コペルニクス的転回という。今ふうにいうと、発想の転換である。この転換が天文学の分野で完成するまで 500 年近くもかかったわけだ。恐らく宇宙観だけではない。身近な人間関係とか国際関係でも、人はいつも自分中心にものを考える。自分本位でなく自由に事物を見るのはむずかしい。コペルニクスの教えは、ここにある。（S48.2.19）　　（案内：黒野晶大）